



秋田駐屯地 史料館



史料館の完成・開館





秋田駐屯地 史料館



郷土旧軍部隊の伝統を継承



現在は...



秋田駐屯地史料館は、東北地方の駐屯地では最後に建築され昭和42年4月に完成、同年10月29日自衛隊創立17周年記念行事で開館し、一般に公開することになりました。当時の資料からは、開館に至る半年間の経緯が記されており、建物はできたものの展示史料が少なく、隊員への資料提供を依頼するとともに地元マスコミ紙を活用して広く市民に展示を募ったことや史料は集まったものの陳列ケース、戸棚等がなかったことなど当時の担当者の苦勞がうかがえました。

昭和44年、郷土旧軍部隊の歩兵17聯隊・歩兵117聯隊・歩兵223聯隊の伝統を継承するため、遺品等を寄贈してほしいと郷土部隊の戦友会に働きかけると大いに喜び、各聯隊の軍旗・文献・写真・勲章・武器・軍装品など数多く寄贈され、郷土の歴戦ものを一堂に展示されました。

4室あるうち、2室には3個聯隊の軍旗・歴代聯隊長等の写真、郷土部隊の戦歴・旧軍の軍服・武器・遺品・装具等を展示しています。

もう2室は、イラク派遣活動時の装備や災害派遣活動の写真などを展示しています。

※ 史料館を見学したい方は、事前に連絡を頂くと見学することができます。

見学は、平日の午前9時から15時までとなっております。

お問い合わせ先：秋田駐屯地広報室 018-845-0125（内線208・219）



秋田駐屯地 史料館



郷土旧軍部隊

歩兵第17聯隊



明治31年、弘前に第8師団が新編されるに伴い、その隷下部隊として秋田に移住し、以来太平洋戦争終戦まで約50年間、秋田県出身者を主体とした郷土部隊として存在しました。

遠くは、日清戦争、日露戦争の両戦役をはじめ、シベリア派遣、満州事変、日華事変等にも参戦し、これらの戦役を通じて「真姿素朴、堅忍不拔」の県民特有の精神を発揮し、輝かしい武勲により、第8師団内隣県部隊と共に「国宝師団」の名を馳せました。

無傷の精鋭部隊として、フィリピンに上陸した当初三千余名を数えた将兵は、わずか1年足らず後の終戦時には、生存者九百余名に過ぎなかったそうです。

明治18年6月 仙台（青葉城跡）に設置、同20年5月編成完結（3個大隊編成）

明治27年8月 日清戦争

明治31年10月 第2師団（仙台）隷下を脱脂し、新編第8師団（弘前）に隷属し、秋田新兵舎に入る。（歩兵第32聯隊（山形）と共に秋田に設置された歩兵第16旅団の編成に入る。）

明治37年10月 日露戦争

明治37年12月 第3軍（乃木大将）の隷下となり第7師団の増援軍として、203高地の攻撃を命ぜられるも同地は第7師団によって占領された。

明治38年1月 黒溝台戦闘、占領（聯隊の各大隊に師団長感謝状授与）

昭和6年～7年 満州事変勃発、動員下令

昭和12年 支那事変の勃発を機に満州派遣

昭和19年 南方作戦動員下令

（太平洋戦争がいよいよ苛烈の度を加えるたびにその決戦場といわれた南方フィリピン戦線への投入）

昭和20年9月 同地にて降伏下山



秋田駐屯地 史料館



歩兵第117聯隊



- 昭和12年7月 支那事変勃発
- 昭和12年8月 臨時編成下令により、秋田歩兵衛戍地において編成完結
- 昭和16年8月 満州国に駐屯し、ソ連国国境の警備・監視に当たる。
- 昭和20年4月 戦局悪化に伴い、本土決戦部隊として福岡県博多湾に展開し、8月の終戦に至り27日復員を完結した。

歩兵第223聯隊



- 終戦の命により、光輝ある軍旗は奉焼されたが、聯隊長吉野直靖大佐は密かに軍旗の一部を持ち帰ったそうです。竿頭の三面菊花賞を三枚に解体し、旗の聯隊名を切り取ったもので、現在日本国内にある軍旗の遺片でこれ以上のものはないと言われています。
- 昭和14年2月 第36師団編成下令により、秋田兵舎内において編成完結、弘前編成第36師団に隷属した。
 - 昭和15年 聯隊は、歩兵第117聯隊と交代し、北支山西省を転戦した。重慶の山西の蒋介石直系軍と毛沢東の共産八路軍と4年間連戦し、その勇猛な戦いぶりから「山西の鬼」と恐れられた。
 - 昭和18年12月 南方戦線（ニューギニア）に転じる。
 - 昭和20年8月 終戦により武装解除
 - 昭和21年6月 復員の途につく。